

懺悔紀
孤絶

芹澤光治良



懺悔紀
孤絶

芹澤光治良

新潮社版

懺悔紀・孤絶

〈芹澤光治良作品集3〉

昭和49年6月10日 印刷
昭和49年6月15日 発行

定価 850 円



著者 芹澤光治良
発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71
電話 (03) (260) 1111(代表)
郵便番号 162
振替 東京 808

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

離 孤 懺
愁 絕 悔 紀
目次

267 141 5

装
画
司
修

芹澤光治良作品集

第3卷

懺
悔
紀

つつましく信仰に生涯をささげた両親に献ず

序 章

松河扶美という未知の女性からはじめて手紙を受けとったのは、「秘蹟」という小説を発表して間もない頃である。

近頃小説を発表すると、きまつて読者から手紙をもらう。その手紙を必ずていねいに読むけれど、作者にあつさり読後感を書いてよこさないような読者の方に、ほんとうの読者はあるのではなからうか。黙々と遠くから私の仕事を見まもっている読者の方が、おそらくもあり信頼もできる。

それなのに、未知の読者の手紙をていねいに読むのは、その手紙が、じかに相手の心と交わるような機縁をつくることがままあるからである。その手紙には、普通の場合、返事を出さないことにしている。いちいち返事を書くのが繁雑であるからばかりではない。その読者は私の書いた作品に返事をくれたようなものであるから、改めてこちらから答えるまでもあるまいと思う。ただ未知の読者は、その手紙をきつかけに、私にいろいろのことを書き送ることがある。

身上相談を持ちかける者もある。精神の苦悩をうったえる者もある。慰藉や救いをもとめる者もある。そんなこと

から、手紙の往復がはじまつて、私は未知の読者を次第に知って行く。未知の人とはらわたまで知り合うのは一つの星を発見するように難かしいことであるが、ありがたく貴重なこともある。

例えば、或る若い技師が召されて出征する日に、この世の思い出に会つて征きたいとて、忙しいなかに大阪からわざわざ訪ねてくれたこともある。この人とは手紙で語りあっていたが、それが初対面であつた。また或る青年は、死期の近いのを知つて、お札を述べたいからとて、お母さんを迎へによこされた。この青年とも、その瀕死の病床で初めて会見したのだつた。

こんなよい例の他に、私の小説のために、息子が信仰をなくしたと言つて、苦情をもちこんだ信仰家もある。私の読者であるために娘が結婚をためらつて、せつかくの良縁を逃してしまふそうだと悲しんで、説得してくれと頼みに来たお母さんもある。

思えば、小説というものは不思議なもので、魂の子供のようなものだ、私は安心してゐたが、翼をつけた天使のように自由に翔まわつて、私の想像だにしないようないたずらを、時々読者に行ふことがあるらしい。従つて無造作に小説を書くことは、無造作に悪い魂の子供をふりまくようなもので、その子供等のわるいいたずらは、いつか子供

の親である私にむくいて来るにちがいない。

そのことに気がついて慄然としたのは、おはずかしいことだが、ほんの二、三年前である。それまでは、若さの向う見ずや現世的な功名心などから、時には心ないしごとをした。その結果、私のつくった天使が、黒い翼をつけて、小悪魔のような悪事をはたらいて廻ることも、考えなかった。恐ろしいことだ。日本文化だとか芸術だとか、立派なことを口にしなが、そして、日本文化のためによいものをのこそうと本心願いながら、私は人々の魂を曇らすような罪惡の種子を、世の中へ吹きまいていたことがあるかも知れない。

ともかく、「秘蹟」という小説を発表したころは、そうした過失をもうおかさないような心の準備もできていた。それ故、未知の読者から、どんな手紙を送られようが、私は落着いていられた。

松河扶美さんの手紙は簡単であった。先生の「秘蹟」を読んで感心したが、自分も天理教の信者であるが、是非お目にかかってお願いしたいことがあるから、お暇をさいてもらいたい——ということであった。

松河扶美さんがどんな人柄であるか、若い人であるか、その手紙ではさっぱり分らなかった。ただ要領のよい候文であるから若い女性でもなさそうな気がした。特に天理教

の信者と名のるのだから老婦人かも知れない。しかし、文字は綺麗であるが自己流で、一字々々ていねいに書いてあるところが、どこか若い女性を思わせた。

会いたいと申込む女性に、いちいち会っていては、しごとができないばかりか、気分をみだされて困る。それ故、女の読者には一般に会わないことにしている。特に、天理教の女の信者というからには、しめっぽくどくどく話されるであろうし、助からない思いで、松河さんに返事も出さなかった。すると、松河さんはいつお訪ねしてよいだろうかと、重ねて鄭重な手紙をくれた。申し訳ないと思いが、なお返事を出さなかった。

返事を出さないのは会いたくないという意思表示であるよりも、どうでも会わなければならないことがあるならば、返事を待たずに来るものだと思知しているからである。それほどのことでなければお互いに時間つぶしであるが、また私には、初対面の人に会うのは、真剣勝負のように疲れることである。

ところが、松河さんは、二、三週間後の秋雨のけむる午後、だしぬけに訪ねて来た。私が或る婦人を玄関に送って出て、玄関の重い扉を開けると、松河さんはベルを押そうかと迷っているように、扉の外に佇んでいた。

「先生でございますか」

やっと会えたというように、澄んだ瞳（ひとみ）をかがやかせて、その言葉をかけられたが、私はとっさに返答ができなかった。というのは、その婦人が一時間ばかり語った話に感動していたからでもあるが、扉の外の松河さんが扉の内の婦人とあまり似た印象で私を打ったからだだった。

その婦人は三週間前に亡くした帝大の美学三年に在学中だった長男の話をしに來たのだった。大学生は私の未知の読者であったが、亡くなる五日前の夜、看護しているお母さんに「秘蹟」を読むようにと話したそうである。婦人は死期の迫った息子の枕許で、幾度も嚙（か）り上げながら、私の小説を読んだという。読み終って息子を見ると、感謝のしるしか、息子の目に大きな涙の粒がたまっていたという。そして、死の前々日の日誌に、あの作品の最後の文句を書いてあったという。

「……この雨の多い、いやな冬は美しい夏で取返しがつくであろう。私の苦しみも全然むだではなかったと思える日もあるう。人間は本質的には宗教的なのだ。然しその信仰が明瞭な言葉や体系に翻訳されると、もう理解できなくなる」

その婦人は亡い息子を思い、悲歎（かなた）のやり場に窮して、私を訪ねたと言っていた。しかし、私は悲しい母を慰める術（べつ）もなく、ただ文学のしごとについて重く責められる思いで、

悲歎を聞き、ようやく婦人を見送ってほっとする瞬間に、ちがった悲しい母親を、松河さんに見たような気がして立ちすくんだのだった。

「あの、ご迷惑ではございませんでしょうか」

きりっとしたけだかい様子に、憐憫（れんぴん）を乞うような表情をして、松河さんはそう私に面会をもとめた。もう誰にも会いたくないほど打ちしおれている私に。

私は重い心で松河さんを二階の書斎に案内した。階段のところで、奥からとんで來たおしゃまな幼児が、

「お父さん、またお客さま」と、不審そうな顔をした。幼児の目にも、松河さんは帰ったばかりの婦人に見えたのであろう。

松河さんはさっきの婦人の掛けていた椅子に、中腰にかけた。同じように、虔（ひつ）ましく両方の手の指をぐんで膝（ひざ）にのせて、うれい深い様子でじっと私を見て、

「お作を拝見していますので、お親しいような気持ちで、ご迷惑をかえりみずに、伺いまして」と、言葉すくなくわびた。

その挨拶もさっきの婦人から聞いたものであるが、みがいのような蒼（あお）白い顔に落着いた瞳を慈愛に輝かせている憂愁な表情も、目鼻立ちや衣裳（えいそう）に相違はあっても、同一人の

ようである。凄まじく生活をたたかった母達は、こんなにも似るものかと、私はつくづく松河さんを眺めて、去ったばかりの不幸な婦人のあとを追っていた。松河さんの訪問の目的が何かと考えずに、松河さんをやはり不幸な母と独りきめていた。

『秘蹟』を拝見して、先生が再びお道（信仰）にもどられたことを知って、私は嬉し泣きに泣きました……それで、ぜひ先生にお頼みしたくて上りましたけれど」

そう松河さんに言われて、やっと候文の手紙をもらったことや天理教の信者であることなどを思い出した。それにしても、天理教の信者らしくない松河さんである。

天理教の信者には身なりや様子にも「私はお道の者です」というような暗いものをつけている人が多い。それも、悲壮な信仰の決意が、自然におもてにあらわれるからで、結構なことであるが、世間並みな人々には、それが或いは野暮くさく、或いはわざとらしく感じられて、滑稽である。しかし、松河さんは信仰で精神をみがかれたのか、中年の日本婦人としては珍しく、知のさえた教養の匂る表情をしていた。

私は黙って、松河さんが何を頼みに来たのかと話し出すのを待った。しかし、松河さんは私が黙っているので困ったものか、大きくまばたきして、なかなか話さない。

その時私が松河さんに何か話すとすれば、私が再びお道にもどったのではないことを述べて、松河さんを失望させるより他になかった――

というのは、『秘蹟』という小説は母の肖像を書いたものであった。母が父と父の信仰のためにすべてをすてて、父に従って素朴に生きぬいた一生を書いたのであるが、私の意図は信仰や生活の無償性の貴さをあらわそうとしたことにある。信仰というものが結果をもとめるものでないことや、信ずるということのなかに、生きた神を発見して、よろこんで一生を送った父や母の生活などを描くことで私自身も、日々の生活のいとなみに、結果をもとめずに純粹に生きようと、発心したかったのだ。

従って、天理教の信仰へ再びかえる告白をしたのではない。天理教であれ、キリスト教であれ、信仰と呼ばれる人間のこころのいとなみが、奇蹟をもつくるような、はげしい貴いものであることに驚歎して、私も自分の神をもとめて、あの小説を書いたのは確かである。文中に天理教としたが、必ずしも天理教ではなく、××教としてもよかった。ただ、現在世界のあらゆる宗教のうちで信仰の最も生きて民衆に働いている宗教は、キリスト教とマホメット教と天理教だと言われるから、そのなかに実例をとろうとして、卑近な父や母の天理教の信仰のすがたを見たのにすぎない。

あの小説に、読者が感心したところがあれば、信仰の無償性に打たれたのだ。神をもとめる私のあこがれに同感したのだ。日々純粹に生きようとすることに共感したのだ。そう私は信ずる。すくなくとも、あの亡くなった大学生やそのお母さんはそうだった。

私はこんなことを、松河さんに話してよいかためらった。松河さんが話し出さないの、私は松河さんの頭越しに、窓から見える岡をぼんやり眺めていた。黄葉した森に秋雨がけむって美しい眺望である。しかし、中年の婦人と黙りこくって向きあっていることの如何に辛いことか。これも、自分の産んだ魂の子供のいたずらのむくいを、蕩児どうじの父や母のように受けなければならぬものとかんねんして、我慢した。やがて、松河さんはもう沈黙にたえられないといふように、

「先生、弟を助けていただけませんか。弟は今までの先生と同じように、お道をはなれて神様の御恩を忘れています。そのために不幸です。悩んでおります。でも、私や父が話しても、ききいれませんが、弟は先生のものを読んでおります、先生を尊敬しております、先生からお話し下されば、きっと再びお道にかえれると思います。父を助けると思って、弟を救って下さいませんか」と、小声ではあるが、まるで絶叫するような突然な言い方をした。

私はびっくりしたが、あまり思いがけない言葉に、答えることもできなくて、松河さんの顔を見るばかり。しかし、松河さんは胸にためた思いが、喉をやぶってあふれ出るように、話しつづけるのだった。

それによれば、松河さんの父、岩尾さんは若い頃から救け一条に生命をささげたような人で、今は或る大教会の理事をしているが、松河さんも、弟の岩尾一良さんも、一時信仰に疑惑を抱いて、信仰をはなれていた。しかし、松河さんは銀行員であった良人をなくすと、自然に再び信仰にかえって、今まで三人の子供を育てながら、においがけ（伝道）などして感謝の月日を送っているが、弟さんは今も無信仰であるために、いろいろの不幸が重なり、松河さんやお父さんが見かねて、信仰にもどそうと、どう説いても相手にしない。ところが、私も若い時に信仰に疑惑を抱き、天理教を公に批判するような勿体ないことを敢えてしたが、再び信仰にもどったのだから、弟さんに私の心の経過を述べて説いたならば、弟さんは私を尊敬しているから、納得して助かるであらう――

こうしたことを、松河さんは涙をためて、熱心に述べたてて、弟を助けて下さいと頼むのだった。弟さんのいろいろの不幸とは何か。信仰にもどれば、その不幸からのがれられるものか。それを訊ねるよりも、私は松河さんの涙ぐ

んだ真剣な態度に圧倒された。松河さんはあの「秘蹟」という小説に、私が天理教の信仰にもどったという告白を読みたつたのであろうが、その誤解が私をたじろがせたのだ。弟さんという人がどんな人か知らないばかりか、私には人を信仰に導くどころか、人を助けることなど思いもよらないことだった。

それ故、私は唇をふるわせて何とも答えられなかった。松河さんは私の顔にじっと大きな目をおいて返答を待っていたが、

「兎に角会って下さいませんか、弟に」と、切なそうに言つて、目を閉じた。まるで神にでも祈るように――

松河さんがどんなに頼もうとも、私は未知の人を助けようとして会ってみる気にはならなかった。特に、本人は私に会うことを欲していないのにきまっていたから。

しかし松河さんは捕えて放さないような熱心さだった。人を助けようとする、と天理教の者は執拗になる。まして相手が弟さんであるから、松河さんがしつこくなったのも無理もないが、助ける能力も自信もない私は、当惑し、辟易して、なんの因果でこんなにせめたてられるのかと、自分が憐れになったくらいだ。

ただ、その数日前に、私達小説家仲間が二、三十人徴用

令を受けて、その幾人かは何処か行先もわからずに出発した。太平洋戦争の、詔勅の下る六、七週間前のこととて、仏印へ行くのであろうか、雲南へ行くのであろうかと、秘かにいろいろ噂がたつた。

「仏印へ行くとなれば、フランス語のできる君など、真先に徴用されなければならない」

そう、仲間は顔さえ見れば私に言つた。それどころか、間もなく私も徴用されることがきまつたと、まことしやかに親切に伝えてくれた友人もある。実際、徴用令を受けた仲間には、私と同じ年齢の友人もあり、言葉が必要であれば、私の征くべきことは、誰の目からも確実であった。

それ故、私はいつお召にあずかって勇んで行けるように、心の準備をととのえた。健康体ではないが、現在病身でもなく、その二年前に北支から中支へ二カ月従軍した経験もあるから、安心して奉公ができると考えていた。

松河さんが、弟を助けてくれ、弟に会ってくれと、涙をためて頼んでいる時、ちょうど私は困却した心のうちに、ふと遠からず徴用になったらと、その場合のことが思い泛んだ。

徴用にあつて征くのは死を覚悟することである。戦場へ行つてからの己れを想像してみると、この婦人の必死な依頼をききいれなければ、必ず戦場で後悔する自分の姿が泛

んできた。弟さんを助けることはできないであろうが、弟さんを思う松河さんの心をやすめることはできる。それも小さい善事であろう。死を前に、小さくても善事をなすことのできるのには、幸いな機会であるかも知れない。死した後、松河さんや弟さんのなかに私の幾部分かを生かすことにもなる。そう、私は悲壮な感情に傾いていた。

ところが、松河さんはこれが最後だという風に、

「先生、弟の家にのご案内しますから、一度だけ行ってくれませんか」と、私が肯定しなければ席をけて帰るような勢いを示した。

「弟さんは病人ですか、私はお授けはできませんが」

「病人ではありませんの。ただ弟をおつれする方が難かしいものですから」

「それなら伺っても、会わないでしよう、弟さんが」

「それは大丈夫ですの、紳士ですから。それに先生がお出で下されば、びっくりして、感動して、お話をききますから」

「いつ行くのですか」

「先生のご都合のよい時で結構でございます」

「私が行きたいのではないから、弟さんの都合のよい時迎えに来て下さい。行っても弟さんが会わなければ無駄ですからね」

こんなことで、松河さんは喜んで帰って行かれた。

松河さんを送り出してから、私は机に頭を伏せて暫く動けなかった。息子を亡くしたお母さんを慰める力もなく、信仰を失って悩む一人の読者を救う自信もなくて、筆で生きている己れがはずかしかった。私の小説を死ぬ間際まで愛して、感動をもっていてくれたというのは、その青年の美しい心のおかげで、私の小説が美しいからではなからう。青年のお母さんは私に会って喜び、松河さんも感謝して帰ったが、その人々の胸に描いた幻影に感動したり喜ぶのであって、私には関係のないことだ。その証拠には、松河さんと別れた瞬間、松河さんとの約束を後悔するような、ぐうたらな私である。そして、そんな己れにとっても耐えられないほど嫌悪を感じるのだ。

それなのに翌日の昼食を終るか終らない時刻に松河さんは私を迎えに来た。弟さんの家へ案内するといって。しかし、行くとなったら喜んで行き、助けるというようなおそれたことも、できるなら努力してみたい。

松河さんの弟、岩尾一良さんの家は、私の家から省線で二駅行つて、そこで私鉄にのり換えて二十分ばかりの郊外にあった。

郊外の私鉄の駅で下りると、松河さんは、

「宅でお休み願いますようか。それとも先に弟の家へ行つ

て、お帰りにお寄りいただきましょうか。その頃には子供等もどっておりますから……」と、多少ためらって、岩尾さんの方へ案内した。

みちみち、長男が大学へ、長女が女子大へ、次男が高等学校へ行っていて、みな私の読者だというようなことを、私がてれるのかまわず話すのだった。

五分も歩くと珍しく牧場の横に出て、やや低い水田を越えた向うに鎮守の森が高く見えた。牧場には数頭の牛がのどかにねそべり、水田は稲がみのり、岡の森は秋の色をかざって、東京市内に、新市区とはいえず、こんな牧歌的な風景があったのかと、驚いたり感心したりした。その森蔭の岡に、岩尾さんの家はあった。

松河さんが弟、弟といっていたので、私はまだ見ぬ岩尾さんを、青年だとばかりきめていた。信仰を失って不幸というのは、精神的苦悶のことであろうが、精神の苦悶は青年のものであるときめていた。ところが、初めて会う岩尾さんが、私と同年輩に思えるので先ず驚いた。その岩尾さんが松河さんの言う弟ではないと思つたくらいだ。

広い表庭の南寄りの樹蔭の寝椅子から立って迎えたが、茶色のズボンに同じ色のセーターを着て、フランスの学生の使う紺のベレー帽をかぶって、若々しくはあったが、長く分けた髪に白いものが目立った。

「よくお出掛け下さいました。僕の家で一番特等席はあの蔭ですから、いかがです、外で失礼ですが、暖かな澄んだ陽を借しんであらで……」と、陽気に挨拶して、自ら籐椅子や丸卓子を樹蔭にはこんだ。

「弟の岩尾です」と松河さんが紹介するのを、そんな面倒はごめんだというように、

「姉さんは向うで婆やを脅励してうまい紅茶でもつくらせて下さい」と言って、私に同感を求めるように微笑した。

しかし、その樹蔭の長椅子に十七、八歳の青年が寝ていたが、足腰のたたぬ不具であることがすぐ分った。岩尾さんの不幸というのはこの不具な息子に原因があるのだなど、私はとっさに思ったが、同時に、岩尾さんには何処かで会つたような気がしてならなかった。

古い檜の樹蔭は、岩尾さんのいうように確かに特等席であった。水田を越えて牧場に向きあい、美しい眺望をほしいままにしているばかりではなく、風もあたらずにゆるやかな陽を受けていた。黄葉した高い檜の梢は、さらさら微風にそよいで、時々私達の肩に枯葉をおとした。

岩尾さんはまた実に不思議な人物で、初対面というしらじらしさを感じさせないものを、身につけていた。岩尾さんの方は、私の小説をはじめからずっと読んでいたというから、私を知己のように感ずることは考えられる。という